

H30年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金
(慢性の痛み政策研究事業)
慢性の痛み診療・教育の基盤となるシステム構築に関する研究
分担研究報告書

慢性疼痛診療における臨床心理士介入の効果に関する臨床

研究分担者 井関 雅子 順天堂大学医学部 麻酔科学・ペインクリニック講座 教授

研究要旨

当科のペインクリニック診療の中で、臨床心理士が介入した患者において、心理面談の成果を多角的評価より検討した。1回1時間、約月1回の介入により、12ヶ月、9ヶ月経過した患者では、BPI、PDAS、HADS、PCS、EQ5D、PSEQ、AOMSに改善がみられた。

A. 研究目的

当科のペインクリニック診療の中で、臨床心理士が介入した患者において、治療効果を多角的に評価する。

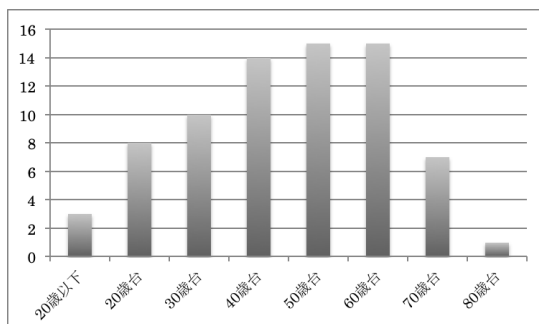
B. 研究方法

(倫理面への配慮)

平成30年1月から31年2月までに、臨床心理士が介入した慢性疼痛患者の、初診、3ヶ月後、6ヶ月後、12ヶ月後の疼痛強度BPI、生活支障度PDAS、不安と抑うつHADS、破局的思考PCS、生活の質EQ5D、痛みに対する自己効力感PSEQ、睡眠障害AOMSの推移を外来業務で通常に使用している各種質問表を用いて後ろ向きに検討した。倫理面においては、個人情報保持と患者の同意のもと施行されている。

C. 研究結果

患者数は、73名であり、男性27名、女性46名であった。年齢構成を下記に示す。



心理面談の介入は、1回1時間、約1ヶ月毎に施行されており、3ヶ月目の問診が施行で

きた患者は28名、6ヶ月8名、9ヶ月4名、12ヶ月2名であった。12ヶ月と9ヶ月介入群では、BPI、PDAS、HADS、PCS、EQ5D、PSEQ、AOMSに改善がみられた。

D. 考察

心理面談の介入は女性に多く、受入が女性の患者で得られやすいと思われる。年齢的には認知行動療法などは高齢者には不向きであり、若年から中年者に有用と考える。また、成果確認には、約1年必要と思われる。

E. 結論

慢性疼痛患者に対する臨床心理士の心理面談は有用である。

F. 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし